

メリディスの詩について

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2556528>

出版情報 : 文学研究. 35, pp.159-169, 1946-03-30. 九州文学會
バージョン :
権利関係 :



メリディスの詩について

中山竹二郎

私は二十幾年の間メリディスの詩を読んでゐる——といふと、あの難解を以て聞えるメリディスの文學に對する鑑賞力を私が十分に持つてゐることを吹聴するかのやうに解せられて痛入るのであるが、實は不圖した機會に手に入れた袖珍版の彼の選詩集が懷にねぢ込んで持ち歩くのに都合がよいので、多くは乗物を待つ間とか芝居の幕間とかにあちこち讀み散らしただけで、靜夜徐ろに反復味讀したことは少いので、メリディス宗の篤信家から叱り飛ばされさうな漫讀振りを永年の間續けたに過ぎない。その間であらうか、未だにメリディス寺の金堂に入ることが許されないで、せいぜい中門のほとりを彷徨し

てゐる。もつともこの金堂を拜觀して歸つて來る少數の恵まれた人達の中にも、内部の本尊佛や壁畫の藝術的價値を感じ耐えて讚美するものもあるし、また他方には冷靜な批判的立場から諸作品の餘りにも明かな欠陥を指摘する人もある。(G. M. Trevelyan などは前者の型であり I. B. Priestley は後者に屬する。) 私のやうに精進の足らない者はかうした歎美や批評論は一應拜聽しても腑に落ちない點が多いため、自分の趣味や能力で鑑賞し得る範圍だけに眼を向けて眺めると、そこにも矢張り美を認めることができる。その美は伽藍全體の構造とか彫刻の均整の中にあるそれだけでなく、手近かに見える柱の

ふくらみや肘木臺股のやうな細部の有つ美しさであつて
その中にある種の満足を感じ得るのである。

メリディスの韻文藝術を伽藍に喩へてみたが、これは
少々誇大な妄言であつて、外形から見てもメリディスの詩
は大きいものではなく、多くは短詩であり、長いので數
百行くらゐの程度であるから、平常からイギリス詩人の
冗長癖（スペンサの「仙女主」の三萬三千餘行は言語道
斷である。プラウニング「指環と本」は十二卷二萬一千
餘行といふ長篇で、現代でもメイスフィールドなどには千
行から二千行を超える詩が幾つもある）に聊か參つてゐ
る私にはメリディスの詩の短いことは有難く思つてゐる
が、しかし之はたゞ量の上から云ふことで、メリディス
詩の内容は實際には非常に大きい。その一例として彼の
秀作「モダン・ラヴ」を擧げてみよう。この詩はソネット
もどきの十六行詩五十齣を連ねただけでペイヂにして僅
に二十二頁ほどの短いものであるが、この中には夫婦愛

の破綻を主題として深刻な悲劇が展開されるにつれ、「心
理描寫と、喜劇と、悲劇と、皮肉と、哲學論と美とが種
を接して現はれ」（Trevelyan の評言）て來るので、ま
るで『エゴイスト』のやうなメリディスの長篇小説を極
度に壓縮し韻文化したほどの複雑な内容を有つてゐるの
で、行數こそ比較的少いが、相當に讀みごたへのある詩
である。（餘談ではあるが、私は東大の學生時代にロバ
ト・ニコルズ氏による此詩の講義朗讀を聞いたが、詩の
題材が丁度ニコルズ氏の表情的な演戲的な朗讀振りに詭
へ向きだつたので、この若いイギリスの詩人講師は熱情
を傾けてこの詩を讀んだ。そして興奮しては顔面を紅潮
させたり、或は靜かに喃々とささやくやうな彼の朗讀は
教室の若い學生を魅了したものである）

詩文學の鑑賞上まことに邪道ではあらうが、全的に把
握し難いメリディスの詩に私をしていつも執着を感じし
めるのは部分的の良さである。これは自分の邸宅を賣物

に出したとき煉瓦の一片をその見本として持歩いたといふ希臘のある街學者のやうに物笑ひの種にならぬとも限らぬが、メリデイスの場合には若干の名句を詩篇の中から引出してそれを興味や考察の對象にすることが許され得ると思ふ。試みに今さうした名句妙節といつたものを二三引用しよう。『戦争の危険について』と題する一八八五年作の十四行詩の中で詩人はわれわれを戒めて云ふ。

When nations gain the pitch where rhetoric

Seems reason they are ripe for cannon's food.

「戦ひは文化の母なり」などといふ詭辯が臆面もなく吹聴されて人々之を異しなないときは、即ち巧言(rhetoric)が道理(reason)として通るやうなときは、國民が爆弾の餌食になる時期も遠くないといふ警語で、昨今の我々の耳には相當にこたへる警句ではある。

How many a thing which we cast to the ground,

When others pick it up becomes a gem! (Modern

Love, XLI.)

これは一旦捨てた女も他人のものになると愛惜の情禁じ得ないといふヒュウマン・ネイチャの弱みを諷したものの。又もつと詩的な表現で人間性の暗い一面を衝いた名句として

Imagination is the charioteer

That, in default of better, drives the hogs. (Modern Love, XXXVIII.)

は辛辣である。吾々の想像は常に清い高いものを追ひ求めねばならぬが、さうした對象を見失ふときには、猥褻極まるものの後を追ひかけるみぢめさに墮する。ふだん文化人と自負してゐながらもそくばくの米や野菜のために農夫の前に叩頭した人達にこのメリデイスの一句は如何に感ぜられるか。

If that thou hast the gift of strength, then know

Thy part is to uplift the trodden low

(The Burden of Strength, II 1, 2)

「汝がもし力を授けらるれば、汝の務めは踏みにぢられし者共を援け起すことなりと悟れよ」といふのは個人の場合では勿論であるが、今日の世界情勢に照らして、民主主義的強國の敗戦國に對する態度であつて欲しい、と念願するのは誤りであらうか。

Assured of worthiness we do not dread

Competitors ; we rather give them hail

And greeting in the lists where we may fail.

(Internal Harmony, II. 1-3)

「わが力量を信じてこそ競争者を恐れざれ。そのみか已れ倒れんやもはかり難き決闘の場に、敵を歡呼して迎ふるなり」とは正しくフェア・ブレイの精神を表はし得たる名句である。

かうした寸鐵的な人生批評のほかにメリディスの詩は巧な暗喩比喩を豊に含んでゐる。比喩的表現にかけては

メリディスは英詩壇で古今獨歩といつてよく、それが全く獨創的であるばかりでなく、應接に連のないほど連續する。總じて世の詩人はメタファーでものを考へるのが常であるが、哲人であり詩人であるメリディスは特にこの表現形式で彼の想念なり自然を歌ふ。讀者は一つのメタファーが完全に把握しきれないうちに次のメタファーと取組みをせねばならぬ。やつとこれを消化し得た時には作者はもう遠く彼方へ進んでゐる。メリディスの詩が難解な所以は一には茲から來る。とにかく暗喩 (metaphor) とか直喩 (simile) とかいふものは修辭學の入門書で説明されてゐるやうな單純な詞姿 (figure of speech) ではなく、メリディス文學に於てはこれが主要な構成要素となつてゐる。しかも彼の比喩は平板な説明的のものでなく、暗示的な謎のやうな晦澁さを有つてゐる。枚舉に追ない程に多い實例の中から比較的引用し易いものを二三枚舉げてみると――

Earth's fluttering little lyre (Napoleon, V.)「大地の羽ばたく小き琴」とは中空に轉る雲雀のことであり、また the dark-winged planet (Hymn to Colour, III.) は曙光の中に輝く曉の明星を意味する。かうした比喻は metaphor と S よりも寧ろ symbol に近し。メリディスは好んで天地融合の理を歌ふが、それには our green (大地) が our blue (天) と結婚するといふ表現を用ひる(例へば Wind on the Lyre の中)。これなどは明にシムボリズムに屬する。メリディス詩集のあちこちに多く出て來る 'Earth' といふ語も單に地といふ局限された意味でなく、殆んどあらゆる現象の中にひそむ靈の象徴として用ひられることが屢々ある。(G. M. Trevelyan に據る、一九二二年版詩集五八八頁の註釋參照) メリディス文學に於けるシムボリズムは一つの研究題目とする價值があると思ふが、こゝでは話を元に戻して比喩的表現の例をも少し擧げてみよう。

詩人は大空に昇る雲雀を謳つてゐる――

For singing till his heaven fills,

'Tis love of earth that he intils,

And ever winging up and up,

Our valley is his golden cup,

And he the wine which overflows

To lift us with him as he goes.

(The Lark Ascending, II 65~70)

(彼の蒼穹の滿つるまで歌ひつゝ、大地の愛をば滴らす、絶えず昇り昇りて、われらが谷は彼の黄金杯、彼は溢るゝ酒にして、登りつゝわれらを高きに揚ぐるらん)

この初めの二行に於ては雲雀の轉る音は水蒸氣のやうに大空に遍く滿ちて飽和状態に達し、そこから水滴となつて地上に落ちて來る。その水滴こそ雲雀が大地に對して有つ愛情そのものである――といふ巧な暗喩である。ま

た終りの三行に於ては暗喩は一轉して詩人がこの美音を聽いてゐる谷地は黄金杯であり、それに注がれる葡萄酒は雲雀そのものに外ならぬ。比喩は更に轉換してこの杯が溢れ詩人は雲雀が飛翔するにつれ大空高く登りゆく。

最後の 'overflows' と 'lift' とを契機とするメタファは明い映像を結ばない。たゞしこの飛禽の妙音により人の心は淨化され向上するといふ詩人の意圖した意味はほゞ明瞭である。も一つ私が常に感服してゐるメリディスの比喩の例として「シエイクスピアの精神」と題するソネ*トからの一句――

... broad as ten thousand beebes

At pasture!

は劇詩人の心魂の宏大さを表はすのに「草食む一萬の牡牛のこと」といふ比喩を以てしてゐる。この句を幾度か口吟むにつれてその韻律の中にも何とはなしに壯大さを感じず。恐らくこの句の含む強勢母韻や二重母韻 [u:]

au, i, a:] の結びつきがさうした効果を出すのに役立つてゐるのではあるまいか。最後に今一つ巧妙な比喩の例を「谷間の戀」の中から拾つてみよう。この詩の主題になつてゐるあどけない村乙女が心輕げに家を出て、隣人の哀愁を慰めることを敍した詩人はこれに比喩の筆を加へて

So when sky and grass met rolling dumb for thunder,

Saw I once a white dove, sole light of earth.

(Love in the Valley, II. 55-6.)

と歌つてゐる。雷を孕んだ黒雲が野一面に低く垂れてゐるとき一羽の白鳩が飛んでゐる。周囲の沈鬱のさ中に獨り憂を知らぬ可憐な村娘の輕快さがかの情景を聯想せしめるといふのである。

比喩の例はこの位にとどめて、次にメリディスの詩に於て傑れてゐる他の一面に移らう。それは自然や人生

の描寫の良さである。そして彼の描く事象が現實の觀察に基くことは彼自ら *rarely write save from the suggestion of something actually observed* (私は何か實際に觀察した物から暗示を得ないで執筆することは稀です) と告白してゐるので明である (Augustus Jessopp 宛 1861 年書翰)、そしてこの觀察に想像が作用して詩歌が生れるのであるが、必ずしも彼は美しい對象を必要としなかつた。I desire to strike the poetic spark out of absolute human clay (私は現實の人間の土塊から詩歌の火花を散らしたいのです) と彼はまた語つてゐる (同書翰)。材料は平凡な田園生活の中から取りながら、それが高度に詩化されてゐる。この場合の詩化は美化とは異つてゐる。對象を華麗な詩詞に包むのではなく、これを凝結して硬い燐石にし、詩的の閃光がこの燐石から發するのである。かやうに凝縮した形象を含んでゐる短い句を二三引用しよう。殊に自然描寫の佳句が多い。

Swift as the swallow along the river's light

Circle the surface to meet his mirrored winglets.

(Love in the Valley, II. 10-11)

(川の光に沿ふて飛び、水に映るわが小翅に達せん
と、川面に小圓を描く燕のごと速き)

この二行は輕快な飛燕の動態を描し得て妙なりと云ひたい。何となく俳句のやうな簡潔さと餘韻が感ぜられるし、修辭の面から見ても非常に凝つてゐて頭韻が一行に各々二つづゝ用ひられたり、*circling winglets* の所謂指小的接尾語を重ねて燕の飛び方を暗示してゐる。次も同じか詩ら——

Earth in her heart laughs looking at the heavens,

Thinking of the harvest...(II. 119-120)

麥が黄ばみかゝる頃の田園の秋を叙した後にこの雄大な句が続く。僅の言葉で天地の大を總括したところにこの表現の良さがある。また一女性の純潔を露に宿す光に喩

All pure to heaven as light

Within the dew within the flower

(The Young Princess, II, VII.)

「花の中なる露の中なる光のごとく」といふ表現も簡素な句の中に「within」を反復して強い効果を出してゐる。

同じく壯大な自然描寫の例としては

Brightening over Danube wheeled

Star by star ... (The Nuptials of Atila, XIV.)

(ダニユウプ河上落星の光芒相次ぐ)

なども秀句で、'wheeled' が良く利いてゐる。「近代の戀愛」の中の息詰まる悲劇的葛藤のさ中にも夫と妻とは夕暮の美景に心和らぐ一瞬がある。その時の風景を叙して

...I have seen across the twilight wave

The swan sail with her young beneath her wings.

(XL. VII)

(我は見ぬ、黄昏の波を渡り行く白鳥の、羽下に雛を携へて飛ぶを)

と主人公の「彼」は云ふ。これは勿論單なる寫生ではなく、悲劇の背景として人間の世界に鋭く反映する自然界の一断面であり、人生の相剋に對流する自然界の諧和を象徴してゐる。總じてメリディスにあつては人生と自然とがしつくりと結び合はさつてゐるので、彼に自然詩人とか人生詩人とかいふ一方的な貼札をつけるのは妥當でない。従つて私がいま試みてゐるやうに、メリディスの自然描寫の佳いところを詩集から引用するとしても、それは人生からいささかも遊離した觀景風物であり得ないことは勿論である。

メリディスは自然の中に常に人間を見てゐる。その人間も素朴な牧歌的な生活を營む人間ではなくして、近代的な複雑な精神文化の體驗者としての人間である。西洋文明は自然の征服をその窮極の目的とすると一般に解さ

れてゐるが、メリディスに於ては、文明と自然とは常に調和すべきものであり、高度に發展した理性を有ちつつ人間は自然の恩寵を享受すべきであると観するのである。

題ではないので、自然と人に關する彼の思索が如何に集約的な表現をとつてゐるかを吟味してみたいのである。

EARTH'S SECRET

「母なる大地」(Mother Earth)とか、或は「われらが母」

(our mother) と云ふ言葉で表現してゐる。實にこの

Earth の意義を體得しないではメリディスの詩心の奥底に達することは出来なう。(cf. Gretton: Writings

and Life of G. M. p. 176) メリディスのこの大地の

理念を比較的簡明に歌つてゐる短詩が一篇ある。題して

「大地の秘密」(Earth's Secret) とし、僅に十四行の

ソネットである。いままで彼の詩の斷片的引用で話をす

すめて來た私は最後にこの十四行詩の全部を茲に紹介し

てみたい。總じて凝縮した表現を好んだメリディスはソ

ネットの短詩形を愛用して、その脚韻構造にも種々の變

化を試みた跡がある。無論ここでは詩形の考察などは問

Not solitarily in fields we find

Earth's secret open, though one page is there;

Her plainest, such as children spell, and share

With bird and beast; raised letters for the blind.

Not where the troubled passions toss the mind,

In turbid climes, can the key be bare.

It hangs for those who hither thither fare,

Close interthreading nature with our kind.

They, hearing History speak, of what men were,

And have become, are wise. The gain is great

In vision and solidity; it lives.

Yet at a thought of life apart from her,

Solidity and vision lose their state.

For Earth, that gives the milk, the spirit gives.

(ひとり野にのみ大地の玄奥展かるるに非ず。よしやその一頁は其處に在りとて。そは極めて明らさまなる奥秘の一面にして、小兒も之を綴り、鳥獸も亦之を知る。謂はゞ盲者のための點字の如し。(さればとて)

熱情に悶え心擾るるところに、黃塵の都會に、大地の秘鑰露はれず。この深秘を知り得るものは、そこそこに赴き、自然と人との間を繁く來往する人々なり。斯る人は「歴史」の語るところ、人間のありし昔のさま、

今のさまを知りて聴し。彼等は達觀と強靱とに於て種るところ大なり。この收穫には生命あり。されども一度大地を游離したる人生觀を懷かつか、強靱も達觀も衰へん。げにわれらに乳を授くる大地は精神の授くるものなり。)

この短詩は比較的に簡明な表現法を取つてゐる。

更めて解釋を加へる要もないが、十一行目の 'vision' は精神的視野の曠さを表はし、同じ行の 'solidity' は地上に於ける生活の確さを意味し、この對蹠的な二語によつて物心兩面の理想境を暗示してゐるらしい。そして「母なる大地」を常に慕ふメリディスが大地の上に精神を置いてゐることは最後の一行によつて明である。

序ながら簡明な表現のいま一の例を舉げて、晦澁を以て聞えるメリディスにもかうした一面のあることを知つてもらひたい。晩年(一九〇〇年)の作で短いながら佳作である

SONG IN THE SONGLESS

They have no song, the sedges dry,

And still they sing.

It is within my breast they sing,

As I pass by.

Within my breast they touch a string,

They wake a sigh.

There is but sound of sedges dry;

In me they sing.

しかし何と云つてもメリデイスの詩の難解は確な事實であり、如何に熱烈なメリデイス宗の信者でもこれを認めざるを得ない。問題はその晦澁を彼の文學の瑕瑾と見るか、それとも詩人の文學精神より發生する必然と解するかである。メリデイス辯護派の一人ハンフリ・ウ・オド

夫人は「メリデイスの難解さ、いな不可解さもメリデイス文學の魅力である」(Mrs. Humphry Ward: A. Writer's Recollections, p. 356.) と述べ、また「メリデイスの作品は讀むのに努力を要する。その努力なしにはメリデイスの有つ美とロマンスとビュウマアの世界に入ることとは許されない。アルプス登山に於ける如く、努力をそれ自體が愉悅である、云々」(同書同頁)と云つてゐるが、私なぞどうも此説には與し兼ねる。深奥な思索も明透な表現を

とり得る。ことさらに難解な語句を用ひる必要はない。

詩はクロス・ワアド・パズルではない筈である。

(あとがき) 二三の學生と語をがちり茶を啜りながら文學を談ずる氣分で書き始めたこの小試論も途中から少し硬くなりまるで座談の席から演壇にかけ上つたやうな態たらくになつたことを讀者にお詫びする。メリデイスの詩については少し纏まつたものを更めて書き戻いと思つてゐる。